

アルディッティカルテットについて

細川俊夫（作曲家）

私がアルディッティカルテットとはじめて出会ったのは、1982年のダルムシュタット国際夏期講習会であるから、彼らを知ってすでに37年の歳月が流れた。その間に、中心のアーヴィン・アルディッティ以外は何人もメンバーを変えながらも、彼らは一貫とした音楽に対する真摯な姿勢を貫いて、ヨーロッパ音楽界の最先端を牽引し続けてきた。数えきれないほどの彼らのために書かれた新曲を世界初演し、また20世紀のシェーンベルク以降の弦楽四重奏の新しい解釈、演奏を通して、それらを蘇らせ古典としての地位を与える。彼らと一緒に歩んできた作曲家には、クセナキス、ラッヘンマン、リーム、ファーニホウのようなヨーロッパの中心に位置する歴史的な作曲家たちがおり、彼らの弦楽四重奏曲はアルディッティの見事な演奏により、すでに現代の古典となっていた。そして私のようなヨーロッパの周縁にいる作曲家たちにまで目配りをして、驚くべきレパートリーの豊かさを常に拡大し続けて、「弦楽四重奏」という概念を改変してきたのである。多様な音楽性の作品群を、あの透明で強靱な「アルディッティ・サウンド」を持って弾きこなし、「弦楽四重奏」というヨーロッパ音楽の真ん中にある古典的な編成に、全く新しい魅力的な現代の血と命を注いできたのだ。その功績は、どれだけ讃えても足りないだろうと思う。

私自身、これまで4曲のカルテットを彼らのために作曲してきた。そしてそれを彼が演奏してくれたことによって、私は自分自身のこれまで知らなかった音楽領域を発見することができた。そして今回さらに5曲めの新作「パッサージュ」を彼らのために作曲した。「パッサージュ」は、通り抜けるという意味。新しい音楽の領域を夢見て出発した彼らは、まだまだ現役でその通路の途中にいる。彼らは一体どこに向かって走り抜けていくのだろうか。彼らが開く新しい響きの宇宙を、私はいつまでも追いかけて聴き続けていきたい。